

○ 片岡 朋美 氏（平成 14 年、娘（当時 3 歳）を交通事故で失う）

[要旨]

被害者ご遺族との出会い

私と井上さん（飲酒・ひき逃げ事犯に厳罰を求める遺族・関係者全国連絡協議会幹事）ご夫妻とのお付き合いは、奥様にお手紙を差し上げてからのことでした。当時、お嬢さんの事故について、井上さんご夫婦が活動されている光景は、テレビで目にしていました。亡くなったお子さんやご両親を思うととても胸が痛かったです。でも結局、私の身には降りかからない出来事のように思っていたと思います。しかし、自分が娘を亡くし、井上さんご夫妻と同じ立場になって初めて、「あの方々がどう生きてこられ、活動を起こす源、生きる力はどこから湧いてきたのだろうか。井上さんにお会いしてお話したい。」と、思いました。奥様から届いたお返事には、「樹里ちゃんの事故は、ニュースを見て知っていました。私も生きることがつらいです。でも、亡くなった子供たちの生きた証を残してあげるのも親の役割です。ともに、生きていきましょう。」と綴られていました。そのお言葉に、私は一人ではないのだと生きる力をいただいたとともに、親としての使命に気づかせていただいたことを覚えています。

事故について

あれから 14 年。生きていたら、娘は今 17 歳、高校 2 年生です。事故は、平成 14 年 9 月 18 日、よく晴れた穏やかな秋の日でした。運動会を 3 日後に控え、その日の朝も「おとうちゃん、おかあちゃん、見て、こうやってやるんだよ。」と、可愛い踊りを見せてくれました。夕方、仕事が終わりに、保育園に迎えに行こうと思ったのですが、急に用を思い出し家に立ち寄りしました。10 分ほどで用事が済み家を出ようとしたとき、「車が園庭に落ちて樹里ちゃんはその下にいて・・・」と担任からの電話を受けました。私は、おもちゃのミニカーが園舎の屋上から落ちて、樹里はそれに当たりけがでもしたのだと思いながら、保育園に急いだのです。

園に着くと、顔面蒼白の保育士たちがうろたえています。嫌な胸騒ぎを覚え階段を駆け上がったとき、土間で布団に寝かされている子供を目にしました。そのシーツは真っ赤に染まっています。でも、なぜ赤いのか、なぜここに寝かされているのか、その現状を計り知ることはできませんでした。ましてや、その子が我が子であるとは思ってもいません。私がそっとその子に近づいたとき、悲しくも、着ていた服から娘であることを確認しました。何度、名前を呼んでも娘の返事はありません。園庭には、フロント部分が大破したワゴン車が停まっています。どうして樹里は出血しているのか、なぜ返事をしてくれないのか。保育士たちは、「大丈夫、脈はあるから。」と言いました。でも、このとき初めて、自分の子供が事故に巻き込まれた現実と直面しました。「家にさえ寄りなれば間に合ったかもしれない。」今でもその思いは消えません。「脈？何を言っているの？何

が大丈夫なの？」と半狂乱の私に、もうそれ以上の言葉は衝いて出ません。

長い時間を経て搬送先が決まり、走り出した救急車の中で、「耳からの出血、心肺停止、呼吸停止！」と言い放つ救急隊員の声。足の付け根に何本も注射を打たれても、お人形のようにパッチリと目を開けたまま身動き一つしない樹里。病院に着いたのは事故から1時間も過ぎてのことでした。

担当した医師に「危険な状態だから、身体を動かさない。」と言われながらも、たとえ障害が残ってもいい、命だけは助けてほしいと、一縷の望みをかけました。しかし、見せられたレントゲンに、私たちは絶句しました。樹里の足は粉々に骨折し、小さな頭の後頭部は原形をとどめてはいませんでした。「薬も点滴も受け入れない状態です。手の施しようがありません。心臓マッサージも永遠に続けることは不可能です。」と医師の告知がありました。長時間に渡る蘇生マッサージのせいなのか、胸板の半分にまで潰れた痛々しい姿、擦過傷だらけの身体を見たとき、今の状態が樹里にとって一番苦しい状態ならば、ここで治療を終わらせたほうがいいのか、と思いました。でもそれと同時に、樹里は私たちの手の届かないところへ行ってしまふのだ。

「誠に残念ですが、これですべての治療を終わるということでご了承できますか。」と、医師からの言葉がありました。娘の手を握り締め、主人と泣き崩れました。事故から2時間半、午後6時30分、樹里は3年3か月の命を落としました。もう、お母ちゃんと言って、私に駆け寄ってくることもない。もう、あの笑顔も泣き顔も見ることにはできない、あの可愛い歌声も笑い声も聞くことはできない。何もかもが信じられませんでした。樹里とともに帰路に着くタクシーの中、まだ温もりの残る小さな両手をずっと包みながら、目の前の現実を受け入れることができませんでした。

保育園側の対応、各関係機関の対応

事故以来、運転者と保育園経営者には、娘の死を悼み、この悲しみを共有してほしいと、心からの謝罪を待ちました。しかし保育園側は、私たちの悲しみに追い打ちをかけるような保身の姿勢に終始し、間もなく事故現場は渡り廊下と遊び場に改装されました。この現状を目の当たりにし、この経営陣に娘の死を悼む気持ちなど毛頭ないことを思い知らされました。運転者も、一生償うと言ってくれた言葉はどこに消えたのか、お参りに来ることはなくなりました。私は、命を軽視している保育園に預けていたことを娘に対して申し訳ないと思い、あの駐車場について安全性を危惧する意見を述べていたら事態は変わっていたかもしれないと思うと、悔しさと後悔から自責の念にさいなまれました。

一方で、警察では、運転者一人が起こした路上の交通事故として処理され、保育園側には刑事責任も行政処分も問われませんでした。「保育園経営者の責任を問いたいのなら、民事裁判をお勧めします。」と、無料弁護士会のパンフレットを手渡されました。その対応から、警察への不信感は募りました。また、名古屋市保育課は、「この保育園は名古屋市の管轄ですが、私立なので、園長に経営方針、保育体制を委ねています。そこに介入できる法律がありません。そこまで言うなら、あなたたち

が法律を作ってください。」と、監督責任を否定しました。

全国の保育園で不慮の事故で亡くなる子供は、年間約 30 名にのぼります。行政が責任から逃れるのであれば、保育施設に対する指導監督責任は一体どこにあるのでしょうか。働く親は、どこに安心して子供を預ければいいのでしょうか。私たちは、すべての保育園経営者に警鐘を鳴らし、もう二度と安全なはずの保育施設内で無辜の子供たちを出してほしくないという思いで、事故から 2 か月が経った頃、約 1 万 5,000 筆の署名を集めて保育所の安全基準の見直しを求める請願書を名古屋市に提出しました。それから 3 か月後、国が定める建築法の立体駐車場柵の適用範囲が変わりました。

時を同じくして検察庁が出した処分は、運転者に略式起訴の罰金 50 万円でした。それが最高額です。「高齢で身体も不自由ということで、正式裁判でも執行猶予がつくでしょう。ならば、罰金刑のほうが罪を認識してもらえるのでは。」と促され、検察庁に委ねた末の初めて知る刑罰の軽さ、不条理な加害者擁護の司法制度でした。運転者は、高齢で義足、難聴、弱視、心臓病、高血圧の持病を持ちながら、運転が許されていました。死亡事故を起こしても、高齢だからという理由で、僅かな罰金を納めただけで今までと変わらない暮らしに戻れます。そして、免停期間を終えると免許証が手元に返り、車に乗れるのです。被害者には人権も名誉も未来もない。その上、遺族がこの悲しみ、寂しさを背負って一生生きていかなければいけない。加害者には守られる人権と保証された将来がある。少年だからと保護され、高齢だからと減刑され、働き盛りだからと執行猶予がつくのでは、法は何のために、誰のためにあるのか。

今の日本の現状は、死亡事故を含め人身事故を起こした加害者の半数は不起訴処分となります。そして、交通事故のほとんどは罰金刑です。年間約 120 万人の負傷者、1 万人の死者を出しながら、日本における司法では、交通事故の死亡者、その命は花粉の重みもないのです。私たちは、命の重さと罰金という刑の軽さに苦しみ、悩み、このままでは刑の軽さに甘んじて再犯や大事故を起こす加害者が後を絶たないという思いで、罰金刑の見直しを求めて全国を回り、再び署名活動を始めたのです。途中で挫折しそうなこの働きかけに、最後まで命を貸してくれたのは娘、樹里であり、井上さんご夫妻はじめご遺族の皆さん、友人たちでした。1 年 3 か月の月日をかけて集められた約 9 万 3,000 筆の署名簿は、平成 16 年、法務大臣にお渡ししました。平成 18 年、罰金刑の上限は現行の 50 万円から倍の 100 万円に引き上げられました。

事故後の日常、周囲の反応

今までの生活は一変し、いっそ気が狂ってしまったほうが、樹里の後を追って死んでしまったほうが、どんなに楽か。でも、私には、まだ小さい 3 人の子供がいる。そのような心の葛藤が続いていました。「あなたは樹里ちゃんのお母さんでもあるけど、今いる 3 人の子供たちのお母さんでもあるのよ。」と、母や友人たちに口々に諭されましたが、生きる気力をなくした私の耳には入りません。主

人を思いやる優しさも、3人の子供を気遣い、言葉を交わし、食事をつくる母の愛情も、空虚な使命感でしかなく、家事を放棄し育児に無関心な母へと変わりました。小学4年生と2年生だった娘たちが膝の上に乗って甘えてきても、無意識に膝から下し、自分はどこかへ立ち去るといった具合で、子供たちと向き合うことを拒みました。

自分一人が底なし沼に落ちたように、勝手な思い込みから家族との温度差を悲観しました。それでも、仕事を休んでそばにいてくれた親友、3か月もの間夕食を運んでくれた友人、代理で子供の行事に行ってくれたママ友、運動会や遠足にお弁当をつくってくれたクラスのお母さん、街頭活動を手伝ってくれた遺族の会の皆さん、この事故を知って署名活動を手伝ってくれたご近所の方もいて、多くの皆さんの手を借りて私たち家族は生きてこられました。本当に感謝してもしきれません。

しかし、罰金刑引き上げの署名活動の際、「もし自分が加害者になったことを考えると、お手伝いできない。」と、親しい友人に言われたとき、裏切られたような気持ちになりました。当時、自分の思いに賛同してくれる方が心の支えでしたので、少しでもそれを拒否されると、その方との接触を控えてしまいました。このような逸脱した私の言動を理解できず、離れていった友人もいます。今思えば、十のうち一つでも力を貸してくれれば、それはよき理解者、協力者だったのかもしれない。

事故から半年過ぎた頃、心療内科に通いました。薬が合わないときなどは、「あのマンションの上から飛んだら樹里ちゃんに会えるよ。」と、幻聴が聞こえてきました。薬の作用で必要以上に眠れるのに身体の脱力感は抜けず、裁判を抱えていながらも提出文書が書けない状況にも陥りました。また、「頑張って。もう一人つくれば。いつまでも思っいても帰ってこないよ。」といった励ましの言葉は、つらく胸に突き刺さるものでした。どん底にいる人は皆、一日一日を必死に生きています。息をするのも一生懸命です。こんな状態で、これ以上何を頑張れと言うのか。この状況で、どうして次の子供がつくれるでしょう。親が、亡くなった子供をずっと思い偲んではいけないのでしょうか。そう叫びたい気持ちを抑えながらのやり取りに疲れました。もし励ますとしたら、「つらいけど、悲しいけど、一緒にがんばろうよ。何かできることがあったらお手伝いするから。」と、そう言ってもらいたかった。そうしたらどんなに心が安らいだでしょう。

樹里と同じクラスだったお子さんのお母さんがお仏壇に向かい、「樹里ちゃんはお空に行っちゃったの。」と子供に教える、その言葉を素直に受け入れられず、もう来ないでほしいとさえ思いました。樹里は好きで命を落としたわけではない。もっと生きたかった。もっと遊びたかった。事故直後は、同じ年頃のお子さんを見たり触れたりするのが本当に辛かったのです。また、お参りにみえる方々に事故の様子を繰り返し聞かれることや、電話対応にも心身ともに疲れ果てました。そんなときは、心のこもった1通のお手紙をいただくほうが、どれほど癒され嬉しかったのでしょうか。

家族(遺されたきょうだい)との関係

毎日の生活の中で徐々に家族との会話も減り、重い空気だけが漂い、家庭が壊れていくのを感じていました。それでも私にはどうすることもできず、事態が悪化していくのをただ黙認するだけでした。まだ私には3人の子供がいる。分かってはいても、気持ちが、身体が言うことを聞かない。そんなとき、ついに懸念していた心配事が現実となってしまったのです。

当時、中学校3年生だった長男は、高校受験を控えていました。学業の成績も部活も素行も、特別問題はありませんでした。しかし、樹里を亡くして数か月経った頃から、勉強するどころか家に帰らなくなりました。学校をさぼり、学校や警察から頻繁に呼び出しがかかるようになりました。長男に振り回されながらも、私の子供に対する無関心は何も変わりませんでした。頭の中は、もう何もしてあげられない樹里のことでいっぱいだったのです。かろうじて進学した高校でしたが、1年生の3学期、とうとう長男が「学校を辞めたい。」と言ってきたのです。そのとき初めて、母親の姿勢がどれほど子供に影響を及ぼすものなのかを痛切に感じました。

長男は、自分も寂しさに潰されそうな上に多感な時期、一番上の兄として悲しみに暮れる両親を支え妹たちの面倒を見なければいけない思いと、自分も妹たちもお母さんの子供には変りないのにお母さんは振り向いてはくれないという思いが、頭の中で渦巻いていたのだと思います。その後、長男は学校を辞めました。

4年生だった長女も、寂しさを紛らわすためだったのか、気がつけば過食に走っていました。いつでも遊びに来ていいよとおっしゃっていただいた近所のお家に頻繁にお邪魔し、それが迷惑だったと噂されていたことも私は知らず、後に知人から聞かされ、娘が不憫でなりません。私に受け入れられない寂しさをその方に求め、すぎる思いで通っていたのだと思います。もしこういった環境に置かれている子供に声をかけてくれるとしたら、子供の気持ちを考慮し、うわべだけの軽率な言葉やその場しのぎの親切心は後々二次的被害につながると認識した上で、責任を持った対応をお願いしたいのです。

真実が知りたい・・・立ちはだかる司法の壁

そんな中、以前にも保育園の駐車場で車がフェンスに衝突し、柵が折れ曲がる事故が起きていたことを知りました。園長にそのことについて問いましたが、理事長、保育士も守秘義務があるからと言って答えません。このままでは一向にらちが明かないと考え、責任の所在を求めて司法に委ねる民事裁判を起こそうと思ったのです。加害者が起訴され刑事罰が下されない限り、被害者遺族は、事件、事故の真相を知ることはできません。加害者の調書、実況見分調書、現場写真等、刑事記録も見せてもらえません。娘の事故は略式だったため、運転者側の情報を知ることはできました。しかし、園長、理事長が起訴されない限り、保育園側の情報は開示されることなく、真実を知る機会さえ与えら

れない。司法の厚い壁に当たりました。

どうして樹里が命を落とさなければならなかったのか、どうして上から車が落ちてきたのか、真実を知りたいと思い、事故から半年が経った頃、司法の判断を仰ごうと提訴しました。裁判を起こすに伴い、損害賠償額を弁護士と決めなければなりません。それは言いかえれば、娘の命に値段をつけるという、とてもつらい作業となりました。提示は1億3,000万円。「お金が欲しいのか。」「そんなことをやって何になる。」「死んだ子が帰って来るわけでもないだろう。」などという人もいました。子供たちは、学校で「1億3,000万」と呼び名を付けられたと言います。こんなとき、先生方から「樹里ちゃんの命はお金には代えられないけれど、なぜ死んでしまったのか調べてもらうためのお金なのだよ。」などと、同級生に対して何らかの口添えをしていただければ、娘たちはどんなに救われたでしょうか。亡くなる原因は様々で、その状況により遺されたきょうだいの精神状態は違うと思いますが、学校関係者は、その子供たちの気持ちを汲んで、周りの子供たちに何らかのフォローをしてほしいと思うのです。毎日行った先々で息子や娘たちがどんなことを言われ、どのように見られているのか、気がかりで仕方ありませんでしたが、とにかく法廷という場で真実や責任の所在を明らかにしてほしい。提訴から3年、保育園経営者の個人責任が認められ、5,800万円の支払いが命じられました。

原因と責任が明らかにされることで、今後の保育園施設は、子供たちにとって安全で安心なものにしてほしいと願ってやみません。その一助となればと、樹里の命の代償、大切なお金は名古屋市に寄付しました。しかし、「あの人たちはお金があるから寄付できるのだ。」「偽善者。」「娘の命をどう思っているのか。」などど、いろいろな批判や中傷を受けたのです。被害者、その遺族は、死ぬまでひっそり息をひそめて生きていかなければいけないのか。それが残された道なのか。笑うことも許されず、何をしても好奇の目にさらされる。世間の目は冷たいものだと落ち込みました。新聞、テレビで報道され、子供たちは学校で「5,800万円もらったのか。」と質問攻めにあつたと言います。無意識に言われる一言が、当時の息子や娘たちには大きな負担となり、学校に行きたくないと泣きじゃくる日もありました。当時、学校や父兄の皆様方には、そっと見守っていただく、あえて触れない優しさを求めているような記憶があります。

次女について

裁判が終結しても、仕事にも復帰せず閉塞的な暮らしをしていた私ですが、必要とされる立場になることで新たに生きる道を考えようと思い直し、自宅の一角を改築して美容室を始めました。3年が過ぎた頃、中学2年生だった次女が学校に行きたくないと言い出しました。樹里を亡くし、育児放棄、情緒不安定、裁判、署名活動、お店のオープンとあわただしく時が過ぎましたが、自分が生きていくのに精いっぱい、子供たちのことは二の次だったのかもしれない。

毎朝、次女に学校に行くことを促しました。しかし、無理やり送り出しても学校には行かず、どこかで時間を潰して帰って来てしまう。朝、制服に着替えても、行きたくないと言き叫ぶ。娘と何度も話し合いました。その結果、主人と私は、行きたくなくなるまで行かなくてもいいという選択をしました。

担任の先生は時折足を運んでくれましたが、学校側は「学校で起きたことではないので、いじめの当事者となる生徒に個別に注意はできません。家庭での指導やコミュニケーションに心掛けてください。」の一点張りでした。部屋に閉じこもり、食べて寝るを繰り返す。思い通りにならないと、暴言を吐き暴れる。耳には爪楊枝でいくつもの穴を開け化膿させ、病院では、「なぜ化膿するまで放っておくのですか。」と親の責任を迫られました。「樹里ちゃんが亡くなってから、寂しかったんだよね、かわいそう。」と親や友人らにも忠告されました。薬の乱用やリストカット、昼夜逆転した生活、夜の徘徊。また手首を切っているのではないかと心配を抱えながら仕事を終え、家に帰ると一目散に娘の部屋に駆け上がり、生きていることを確かめる、ほっとする。そんな毎日でした。手作りのお弁当と夜一緒に眠ることが、唯一娘との接点で、どんなに嫌がられても、私は娘の部屋で眠りました。なぜこんなにつらいことばかり私たち家族に降りかかるのか。運命を恨み、やけになった時期もあります。私たち親の責任は、遺された3人の子供たちを社会に送り出すこと、ただその一念でこの時期を乗り越えてきた気がします。

現在

井上さんはじめ多くの仲間との出会い、また友人たちの支えが生きる大きな糧となりました。長男はその後通信制の高校に入り、現在は私と同じ美容師となりました。長女も今年大学を卒業し、社会人になることができました。中学2年生から1年半不登校だった次女も高校に進み、美容学校を出て美容師となり、2年が経ちます。今では大変だった当時を振り返り、子供たちと語れるほどになりました。

本当なら17歳のはずの樹里は、今でも3歳のまま成長することはありません。樹里の匂い、キラキラした大きな瞳、柔らかな髪、ふわふわしたほっぺ、小さな手のぬくもり、可愛いしぐさ、抱きしめたときの感触、温かい息遣い。幻でもいい、もう一度樹里に会いたい、声が聴きたい、抱きしめたい。樹里の受けた想像を絶するこの苦しみを思えば、私のつらさなど取るに足りません。まだ生きたかった、まだたくさん遊びたかった樹里の無念を胸に、できる限り精一杯人生を生きていこうと思います。樹里に再び会えたとき、「樹里ちゃん、お利口さんしていた？」と聞いて抱きしめてみたいです。そして、「お母ちゃんも頑張ってきたよ。」と言える母でいたいと思います。

今は、娘を亡くしたときより樹里に近づいた気がします。一日一日、歳を重ねることが楽しみになってきました。私は樹里を亡くし、娘に多くの宿題をもらいました。人の生きる道は一つではなく、たくさんあります。ご支援も、様々なケースを想定したきめ細かなケア、マニュアル作り、働きかけ

を望みます。これから私も3人の子供とともに、たくさんの宿題をやりながら一歩ずつ歩んでいこう
と思っています。この私のお話が、遺されたお子様方のご支援の一助となりましたら幸いです。